

# 『大江千里集』における「述懐」と「詠懐」に関する考察

—その相違点に着目して—

邵楠\* 吉村誠\*\*

A Study of Oe no Chisatoshu's "Jukaibu" and "Eikaibu"

: Focusing on the Differences between Them

SHAO Nan YOSHIMURA Makoto

(Received September 27, 2024)

『大江千里集』には「述懐」と「詠懐」という二つの部立てが設けられている。このように「述懐」と「詠懐」をともに和歌の部立てとして採用したのは『大江千里集』が嚆矢となる。部立ての名称からすると、述懐部と詠懐部はともに「懐」が述べられた歌が集められているものと解せるが、果たして両者の間にどのような違いがあるのか。従来、『千里集』における「詠懐部」の歌については、それが天皇に我が身の不遇を訴えるものであると指摘されてきた。また、「述懐部」については、「詠懐部」の主題と一括りにして論じられる傾向にあった。前者の指摘については論者も同様の立場であるが、後者については見解を異にする。本稿では、『千里集』における述懐部と詠懐部の違いについて、主題や表現手法の観点から指摘する。そして、時代状況と結びつけて、それらの違いの背景には千里のどのような意図が働いているのかについて検討していく。

## 1. 問題提起

『大江千里集』には「述懐」と「詠懐」という二つの部立てがある。このように「述懐」と「詠懐」という二つの部立てが一つの歌集の中で並立している例は『千里集』の成立前後に見られない。「述懐」や「詠懐」という語はもともと中国の漢詩題に用いられてきたものである。「述懐」を題にもつ詩は、早くには中国の張載、支遁の

作にあり<sup>1</sup>、初唐詩では、「述懐」の詩題が李百薬、魏徴、李嶠などの作に見える。『文選』では「詠懐」という分類名を示し、江淹の「阮步兵籍詠懐」と阮籍の「詠懐詩」十七首を所収する<sup>2</sup>。一方、日本の漢詩集では、「述懐」は詩題として『懐風藻』、『文華秀麗集』に見える。また、和歌集では、『万葉集』の題詞や左注に「述懐」の語が散見するが、「詠懐」という分類名は見ることができない。

\*山口大学東アジア研究科比較文化コース

\*\*山口大学名誉教授

「述懐」と「詠懐」を和歌の部立てとして採用したのは『大江千里集』が嚆矢となる。

『千里集』には述懐部の歌が一二首あり、その殆どが『白氏文集』における詩句を句題としている。しかし、句題の典拠となった『白氏文集』には「述懐」をタイトルとする詩は一首もない。また、「詠懐」という部立名については、中国の詩文集では、古来より詩人たちに愛用されてきており、『白氏文集』にも「詠懐」を題とする詩は少なくない。しかし、『千里集』における詠懐部の歌はそれ以外の部立ての歌とは異なり、句題を伴っておらず、それらは「別亦加自詠十首」(『千里集』序文)として歌集の末尾に添加された十首の和歌を指す。詠懐部として収められたこれら十首の歌は、『千里集』の中でどのような位置づけであったのか。この件に関しては、先行研究が積み重ねられてきた。例えば、山口博氏は、「千里が詠懐歌十首の内容をはじめとして、この歌集には天皇に我が身の不遇を訴える意を込める」という見解を示している<sup>3</sup>。同様の主張は小野泰央氏にもある。小野氏は「天皇謁見が希少のものであり、さらに不遇感が切実なものであればあるほど、歌人たちは自らの思いを千載一遇の機会である詠歌に込めなければならなかった。『大江千里集』の「詠懐」部もまさにそのような動機によって詠まれた歌群である」と説く<sup>4</sup>。

「詠懐部」が句題を伴わない点でそれ以前の部立てと形式を異にしており、そこに収められた歌群が自らの不遇を天皇に訴えるものである、という把握は本論でも踏襲するところである。但し、ここで留意したいのが『千里集』では「述懐部」という部立てもあるという点である。部立ての名称からすると、「詠懐部」と同じく千里の「懐」が述べられた歌が集められているものとするが、果たして両者の間にどのような違いがあるのか。ちなみに、中国の漢詩では、「述懐」と「詠懐」は区別されておらず、同種のものとして捉えられていた<sup>5</sup>。『千里集』の研究においても、そういった事情を受けたか、述懐部と詠懐部の質的な差異を問題にはせず、一括りにして論じられる傾向にあると言える。例えば、内田徹氏は「そもそも「述懐歌」という表記自体は既に『万葉集』に見られることであるが、自身の憂いを嘆くものという明確な意図のもとに詠まれた述懐歌としては、大江千里の「句題和歌」と、それとともに献上された「詠懐」の歌十首が最初期のもと考えられる」と指摘し、両者を弁別してはいない<sup>6</sup>。また、木村尚志氏も、『千里集』の「末尾には「述懐部」12首と「詠懐」10首の計22首の歌がある。昇殿を許されない身の不遇の愁訴が見出せる」と述べる<sup>7</sup>。

以上、『千里集』の詠懐部に関する先行研究を概観して

みたところ、「詠懐部」に収められた歌群が不遇を詠んだものであるということ、そしてその在りようは「述懐部」と同様であると把握されてきたことが分かる。こういった先行研究の状況に対して本稿では、前者の不遇詠という把握については同様の立場に立つものの、後者の述懐部との関係については別の見解を持っている。次節以降では、『千里集』における「述懐部」と「詠懐部」の違いについて、主題や表現手法の観点から検討を加えていく。

## 2. 『千里集』における「述懐部」の主題

『千里集』には述懐部の歌は十二首ある。そのほとんどが白居易の詩を句題とするものである。それらの詩では概ね、無常観、嘆老や諦念の交錯する感懐が詠まれていると考えられる。ここではまず、無常観を嘆く次の四首を見てみよう。

句題：浮生短於夢

—『白氏文集』「野行」 卷十八 1162<sup>8</sup>

和歌：よるべなく そらにうかべる ころこそ ゆめ  
みるよりも はかなかりけれ

—『大江千里集』 述懐部 108

この歌の句題では「浮生」という語が詠まれている。「浮生」という言葉は『漢語大詞典』によると、『莊子・刻意』の「其生若浮、其死若休(其の生や浮かぶが若く、其の死や休うが若し)」<sup>10</sup>に由来するものである。「浮生」とは「生」が浮いているようなものであり、休息するような「死」の対極状態を指し、人生の定めなさを強調する。句題が詠んだのは「浮生は夢より短い」であり、人生の短さを強調する。この句題を踏まえて千里が詠んだ歌では、「浮生」が「浮かべるころ」と解釈され、「夢」はそのまま直訳されている。「短」は「はかなし」に詠み替えられている。ここまでは基本的に句題の意味の通りに翻案されている。注意すべきは「よるべなく」と「空」である。これらは句題に見られず、千里自らが付け加えた語である。おそらく「浮生」の原義を踏まえて発想された表現であろう。つまり、当該歌で千里は句題における人生の短さへの嘆きを受け入れると共に、「浮生」という語が持っている頼りとするところのない不安定感をも詠み加える。

句題：身覺浮雲無所着

—『白氏文集』「答元八郎中楊十二博士」 十七卷 1067

和歌：わがみをば うかべるくもに なせればぞ ゆ  
くかたもなく はかなかりける

—『大江千里集』 述懐部 110

110 番の歌は基本的に句題を翻案したものである。句題は空に浮かんでいる雲のように捉えどころなく、あて

のない「我が身」の状態を詠む。それは原拠詩の第二句「心同止水有何情」に詠まれた、静止している水のように落ち着いている「心」の状態と対比をなして、我が身の不安定さを表している。和歌の「わがみをぼうかべるくもになせればぞ」は句題の「身覺浮雲」に、「ゆく方もなく」は「無所着」にそれぞれ依拠して詠出されたものである。「はかなし」は歌で補われた語であるが、句題の主旨から見れば、この添加された表現は千里が句題を全体的に摂取した成果だと言える。句題と同じく、和歌もあてがえない、不安定な身を詠んでいる。

111 番と 112 番の歌はそれぞれ白居易の『想東遊五十韻』における「幻世春來夢」、「浮生水上漚」という連続する二句を句題としている。この二句は、幻の世は春の夢のようであり、人生は水の泡のように儚いことを述べたものである。

句題：幻世春來夢

—『白氏文集』「想東遊五十韻併序」卷五十七 2717  
和歌：まぼろしの よとししりぬる ころころには はるくるゆめと おもほゆるかな

—『大江千里集』 述懐部 111

句題：浮生水上漚

—『白氏文集』「想東遊五十韻併序」卷五十七 2717  
和歌：かりそめに しばしうかべる たましひのみづのあわとも たとへられつつ

—『大江千里集』 述懐部 112

111 番歌の句題は、この世は幻で春の夜の夢のようなものであるという意で、世の中の虚しさを詠んだものとなる。和歌の「まぼろしのよ」は句題の「幻世」、「はるくるゆめ」は「春來夢」と対応している。第二句にある「～とししりぬるころ」と最後の「おもほゆる」は句題には無く、和歌において新たに添加されたものである。歌の意味はこの世は幻のようなものと知った私の心には、全てが春の夜の夢のようだと思われることよ、となる。主題は句題と同様であり、世のはかなさが詠まれている。112 番の歌が詠んだのは人生のはかなさである。この歌では、「うかべるたましひ」と「みづのあわ」が句題の「浮生」と「水上漚」をカバーしている。その上で、「かりそめに」と「しばし」という修飾表現が付加され、それによって水の泡のような人生の儚さがより強く強調される。以上の四首は、「人生」「世」の儚さ、不安定さといった無常観への詠嘆を述べたものとなる。これに対し、無常観への克服を詠む歌は次の三首ある。

句題：自静其心延壽命

—『白氏文集』「不出門」卷五十七 2749  
和歌：さだめなき ころころひとつを なしつるぞいのちをのぶる ものにぞありける

—『大江千里集』 述懐部 104 番

当該歌の句題は自らが心を静かにして、寿命を延ばすと詠むものである。句題中にある「自静其心」とは心の調え方で、「延壽命」のための方法である。それを踏まえて詠まれた歌も、心の有り様を調えることによって寿命を延ばすと詠むものであるが、心の調え方の面で句題との相違が見られる。原拠詩と合わせて、句題における心の調え方を見てみよう。

不出門來又數旬、將何銷日與誰親。  
鶴籠開處見君子、書卷展時逢古人。  
自静其心延壽命、無求於物長精神。  
能行便是真修道、何必降魔調伏身。

原拠詩を見てみると、句題の前の首聯と頷聯は、「外出しなくなつてからこのかた更に数十日を重ねた。何によって日々を過ごし、誰と共に親しく交際しようか。鶴の籠を開けば、君子のようなその姿が眺められるし、書物を広げれば、同じ思いを持つ古人に出会うことができる」<sup>11</sup> という意であり、これは要するに静かで悠々自適な閑居生活の状態を描写する。そのため、句題に言う「自静其心」は静かで安楽な閑居生活を送ることによって、心の平静に達するのを指す。和歌の場合は、句題にある「延壽命」は「いのちをのぶる」と直訳される。「自静其心」の部分について、和歌の意味は句題と少し異なっている。和歌では、「自静其心」は「さだめなき ころころひとつをなしつる」と詠まれる。「ころころ」の前に「さだめなき」という語を新たに添加して、不安定、落ち着かない心の有り様を表す。それを踏まえて、「さだめなき 心ひとつをなしつるぞ」について分析してみると、不安定で落ち着かない散漫な心一つを鎮めようと試みることを指すと解しておきたい<sup>12</sup>。和歌全体の意味としては、不安定な心を雑念無しに平静にすることこそ、寿命を延ばすものである、となる。一人で閑居生活を送ることにより、心を静かにして、寿命を延ばすと主張する句題に比べ、和歌の重点は、不安定な心への対処に置かれていると言える。

句題：憂喜皆心灰

—『白氏文集』「望春」卷十八 1158  
和歌：かなしきも うれしきことも 大かたは ころころのはひと 成りぬべらなり<sup>13</sup>

—『大江千里集』 述懐部 109

当該歌の句題は、「憂」と「喜」は共に「心灰」だと述べたものである。「心灰」という語は、『漢語大辞典』によれば、「仏教用語。心中的世俗雑念」とあって<sup>14</sup>、心の中にある世俗的な雑念を指す。それを踏まえて、句題の意味は憂と悪い、喜と悪い、全部心の中にある世俗的な雑念である。和歌との対応を見てみると、「かなしき」と

「うれしき」は句題の「憂」と「喜」に照応する。「皆心灰」に相当する表現としては「こころのはひと成りぬべらなり」が該当しよう。和歌の趣旨は句題と同様であり、悲しいことも嬉しいことも全部、心中の世俗的な雑念である、という諦観的な態度を示す。

句題：夢中歎笑又勝愁

—『白氏文集』「城上夜宴」巻五 2469

和歌：夢にてもうれしきことを みるときはただに  
うれふる 身にはまされり

—『大江千里集』 述懐部 115

115 番の句題は「夢中の歎笑も憂愁に勝れり」という意である。この句題の背後について、雋雪艶氏は『及時行楽』の思想があり、それは人生の儚さを自覚した古代の中国人の身の処し方を示す典型的な表現である」と指摘している<sup>15</sup>。では、実際に句題の原拠詩を確認してみよう。

留春不住登城望、惜夜相将秉燭遊。  
風月萬家河兩岸、笙歌一曲郡西樓。  
詩聽越客吟何苦、酒被吳娃勸不休。  
従道人生都是夢、夢中歎笑亦勝愁。

確かに、原拠詩にある「従道人生都是夢」に目を向けると、そこでは、白居易が「人生」を「夢」に譬えることで、人生の儚さを強調している。そして、人生そのものははかない夢であるから、「憂愁」に閉ざされるより、生命を大事にして楽しく過ごすべきだという主張を展開する。和歌では、原拠詩の中から「夢中歎笑又勝愁」の一句だけが句題に選ばれた。原拠詩にうかがえた「及時行楽」という思想の「人生は夢のようにはかない」という前提も後景に退く。そのため、句題と和歌との間で若干の相違も出てくるようである。和歌の「うれふる」は句題の「憂愁」に対応し、「ゆめ」は「夢」と対応するが、その「ゆめ」は人生の比喩という意味が希薄化し、現実と対比されるものとしての意味が前面に出てこよう。そのように解すると、和歌の意は、たとえ夢であつてもうれしいことを見るのは現実の我が身を嘆くより良いといったものになるであろうか。即ち、原拠詩に比して和歌では、悲嘆に沈み込まないという対処法に比重が置かれてくることになる。

次の 106 番と 107 番の歌は自分の自由な心の持ち方や日常の暮らしている様子を描くものである。

句題：心似虚舟浮水上

—『白氏文集』「詠懐」巻六十五 3232

和歌：こころをし あまのうきぎに なしつればな  
がるるみづに こころまされり

—『大江千里集』 述懐部 106

106 番歌の句題の意味は心が虚舟のように水上に浮か

ぶということである。『漢語大詞典』によれば、「虚舟」には「人事漂忽、播迁无定（落ち着かなく、不安定）」というネガティブな意味と「任其漂流的舟楫（流れる水に任せて、繋がらない舟）」というポジティブな意味がある。原拠詩と照合して、句題にある「虚舟」の意味を確かめてみよう。

隨縁逐處便安閑、不住朝廷不入山。  
心似虚舟浮水上、身同宿鳥寄林間。  
尚平婚嫁了無累、馮翊符章封却還。  
處分貧家残活計、疋如身後莫相關。

原拠詩の文脈を見てみると、句題の前に置かれている「隨縁逐處便安閑、不住朝廷不入山」は「機縁のままに従えば、どこにいても安楽なものだ、朝廷にもとどまらず山に隠居することもない」<sup>16</sup> という意であり、これは要するに（現実には抵抗せず）機縁に従って、「中隠」の生き方で安楽に暮らすことを主張する。それゆえ、それに続く句題にある「虚舟」は流れる水に任せて、繋がらない舟のことというポジティブな意味を指すと解される。こうして見ると、句題の趣旨は、（現実には順応し）何のこだわりもなく、自由な心の有り様を詠むところにあると言えよう。句題の「虚舟」に対応する「浮木（うきぎ）」は『日本国語大辞典』（第 2 版、小学館、2007 年）によれば、「船、またはいかだ。うけき」などの意となる。そして、「浮水上」が「なかるるみづにこころまされり」と詠まれる。和歌は、私は心を舟と思ひなして、繋がらずに流れる水に任せる、こういうこだわりがない心の持ち方がより自由だと感じる、という意である。句題と同じく、千里の眼目もこだわりがなく、自由な心の持ち方を強調するところにあると思われる。

句題：何獨朝々暮々閑

—『白氏文集』「長安閑居」巻十三 665

和歌：はかもなく ならむ我身の ひとりして あした  
ゆふべに しつかなるらむ<sup>17</sup>

—『大江千里集』 述懐部 107

107 番の句題は「どうして君だけ朝となく夕方となく閑静な気でいられるのか」と怪訝に思わぬ者は無い<sup>18</sup> という意味となり、静かに暮らせるのは自分一人だけであると誇るニュアンスを含み、閑居の生活に満足する気持ちを示す。当該句を踏まえて詠まれた歌を見ておくと、初句の「はかもなく」は句題になく、新たに添加された語である。また、初句以降の「いつも我が身の ひとりして あしたゆふべに しつかなるらむ」は句題と対応する表現である。歌意は、どうしていつも我が身一人で朝夕静かに暮らしているだろうか、それは仕事がないためなのだろう、というものである。閑居の生活に満足する気持ちを示す句題と比して、独りで静かに暮らしている様

子を描くことに比重が置かれる。

また、嘆老を主題とする歌は次の二首である。

句題：心更老於身

—『白氏文集』「答友問」卷十四 792

和歌：世中を おもひしりぬる ころこそ 身よりは  
すぎて おいまさりけれ

—『大江千里集』 述懐部 105

句題：素鬢俄頃変春華

—『初学記』「聴鳴蟬詩」卷三十蟬第12

和歌：くろかみの しろくにはかに なりぬれば は  
るのはなとぞ みえわたりける

—『大江千里集』 述懐部 113

105 番の句題では身と心を対比させることで、身より心の方がもっと年老いたことを詠むものである。和歌の主題は句題とほぼ同じであり、表現上も概ね句題を直訳する。ただ、「ころ」の前に「世中をおもひしりぬる」という表現が付け加えられることによって、身よりも心の経験値に比重が置かれるようになっている。113 番の句題では、髪の毛が白くなることが春の花に喩えられる。和歌においても、髪の毛が白くなったことを「はるのはな」の白さで喩えることで老いを表現する。

114 番の歌は主君の恩恵を謳うものである。

句題：恩光春景去<sup>19</sup>

和歌：我が君も 春のひかりに ひとしくは くさきな  
る身と 知りぬべらなり

—『大江千里集』 述懐部 114

句題にある「恩光」は『漢語大詞典』の解説により、「恩沢」を指す。そこに取り上げられた漢詩文の用例<sup>20</sup>から見れば、「恩光」は君主からの恩恵を形容するように用いられる。「春景去」という語は中国唐代中期の詩人劉禹錫の『送春曲三首』にある「春景去、此去何時回。遊人千万恨、落日上高台。寂寞繁花尽、流鶯歸莫來」の句に見られる。そこでは、「春景去」は春の景色が過ぎ去ったことを表す。この二つの語を結びつけてみると、句題は主君の恩寵が過ぎ去った春の景色のように無くなったことを嘆くと解される。和歌では、前半の「我が君も春のひかりにひとしくは」に仮定を表す係助詞「は」が付け加えられている。後半の部分は全て、新たに添加された表現である。和歌の意味は「我が君の恩恵が春の光に等しいものならば、我が身はその春の光に照らされる草木と同じであることを知っているようだ」となるであろうか。恩寵を失うことを嘆く句題に対して、和歌では主君の恩恵を謳う雰囲気を感じられる。なお、こういった主君の恩恵をめぐって展開される歌は述懐部では当該の一首だけである。但し、詠懐部には多く見られる。後で詳述する。

以上は『千里集』の述懐部における歌に関する考察となる。全十二首のうち、世の儂さ、人生の儂さ、我が身の不安定などのような無常観を嘆く歌は四首、これらの無常観への克服を詠む歌は三首あった。また、自由な心の持ち方独りで静かに暮らしている様子や主君の恩恵を謳う歌はそれぞれ一首があった。老を嘆く歌は二首見られる。これらの歌の主題からすると、「述懐」部に詠まれる「懐」は、千里が自分の内面を凝視し、そこに潜んでいる我が身、人生、世の中に対する認識、即ち、無常観、無常観への克服、嘆老などのような感傷的な詠嘆と超然的な態度を基調とする人生観や処世観である。また、以上の分析から、述懐部の歌は「懐」を率直的に述べる傾向にあることが明確に読み取れる。比喻表現を使った歌があるが、歌では「懐」があくまでも主体であり、比喻表現が「懐」をより詳しく表現するために存在するものであり、修飾的な役割のみを担っている。

### 3. 『千里集』における「詠懐部」の表現

『千里集』の詠懐部には歌が十首ある、句題を伴わない。主題上、集中的に不遇を詠む。この特徴は本論の冒頭に掲げた先行研究がすでに指摘したところである。これについて、論者も肯定的な立場である。但し、詠懐部に詠まれる不遇は事物を介して導かれているという点を本稿では指摘しておきたい。

これらの歌では、事物に千里自身の姿を重ねた歌は116 番、118 番、120 番、123 番である。これらの歌で、「雁」「草」「鶴」「鶯」はそれぞれ千里自身を象徴する表現となっている。

くもわけて みやこたづねに くる雁も 春にあひて  
ぞ とびかへりける

—『大江千里集』 詠懐部 116

116 番の歌で歌材となっている雁は秋になるとやってきて、春に北へ帰る渡り鳥である。歌における「雁も春にあひて」について、『千里集全釈』は「あの雁でさえも春にあつて帰るのだから、この私にも春にあう機会を与えて欲しい」と解釈する<sup>21</sup>。このように春という季節が何らかの機会の隠喩として用いられる和歌は千里の詠歌以外にも多く見出すことができる。例えば、「霜枯れに見えこし梅は咲きにけり春には我が身あはむとはすや(『拾遺和歌集』卷第十七・雑秋 1155 番)」、「たらちねの跡や昔に荒れなましおどろの道の春に遇はずは(『玉吟集』(一)・雑十五首 896 番)」などが挙げられる。これらの歌では、「春」は官位昇進の季節として用いられている<sup>22</sup>。ここで取り上げている116 番歌の「春」も昇進の季節という含意が認められよう。表面上、春になって帰るといふ雁の習性が詠まれているが、そこには千里の気持ちが

含まれている。彼は春の帰雁に自身をなぞらえつつ、昇進を望む自己を表現しているのである。

はるのみや はなはさくらん たにさむみ うづもる  
くさは ひかりをもみず

— 『大江千里集』 詠懐部 118

当該歌にある「春」も官位昇進の季節として捉えてみたい。その官位昇進の機会に「宮」に集う人々は「花」を咲かせている。つまり、昇進を果たしているのである。一方、「たに」にはその春がまだ訪れず、冬の寒さが残っているようだと、その「たに」に埋もれている「くさ」は春の「光」を見ることできない、と詠まれている。前節で触れた114番歌では天皇の恩恵が「光」に喩えられていたことをここで顧みておきたい。千里はこの谷に埋もれ、光を見る機会を逸している草に自身をなぞられていると解しておく。谷に埋もれる草が太陽の光を受けることができないという自然界の現象を媒介にして恩恵が届かない身を暗喩的に詠み込んでいるのである。

あしたづの ひとりおくれで なくこゑは くものう  
へまで きこえつがなん

— 『大江千里集』 詠懐部 120

120番の歌に見える「鶴」は『毛詩』「鶴鳴」篇に踏まえるものである。「鶴鳴」篇と同じく、当該歌では「鶴」の鳴く声が高らかという特徴が目される。歌における「鶴」以外の表現について、田中智子氏は「沢」＝沈淪・地下、「雲の上」＝天恩・殿上・天皇という寓喩の型が生まれたのである」と説明する<sup>23</sup>。こういった構図に沿って見れば、千里は鶴が持っている声が高らかという特徴に着目し、昇進が遅れる自身の姿をひとりおくれる孤鶴に重ね合せている。そして、「鶴」の声が雲の上に届くことを詠むことで、昇進が遅れる沈淪の身を帝に聞こえて欲しいという気持ちを表現する。

おもふこと なくうぐひすに つけたれば いろもか  
はらぬ われひとりてへ

— 『大江千里集』 詠懐部 123

この歌は鶯が「色もかはらぬのは我ひとり」と伝えることを詠む。歌に詠まれる「鶯」、「色も変わらぬ」、「我ひとり」という三つの語の間にある関わりについて、『千里集全釈』は「鶯の色は褐色がかかった緑色をしており、それと六位の官袍の色である深緑色を重ね合わせて、いつまでも昇進できず緋色の袍（五位）を着られない身を言ったものである」<sup>24</sup>と指摘する。この指摘に従うと、「色もかはらぬ鶯」は昇進が遅滞している千里の姿を象徴すると解することができる。千里は鶯の色と六位の官袍の色との類似性を切り口として、鶯の外見的特徴に言寄せ、低い官位から脱出できない身の憂愁を訴えるのである。

以上は千里が自身の姿を事物に重ね合わせる歌となる。次の五首は、千里が事物に託して自分の不遇を詠むものとなる。

あまぐもや 身をかくすらん 日のひかり わが身て  
らせど みるよしもなき

— 『大江千里集』 詠懐部 121

前述の114番と118番の歌と同じく、この歌に見える「日の光」も天皇の恩恵の喩えと解しておく。歌において千里は、日の光が余すところなく照らすという観念のもとに、雲によってその日の光が届かない我が身を詠み、恩寵が届かない自身の境遇を含意させる。

みやこまで なみたちくとも きかなくに しばしだ  
になど 身のしづむらん

— 『大江千里集』 詠懐部 124

しらなみの たちかへりくる かずよりも わが身を  
なげく ことはまされり

— 『大江千里集』 詠懐部 119

この二首の歌はともに「波」を歌材とする。124番歌の意味は、『千里集全釈』によれば、「都まで波が立って来ているとも聞いていないのに、少しの間でさえもなぜ（浮かばず）我が身は沈淪するのでしょうか」という<sup>25</sup>。この解釈を踏まえて、和歌の内容を理解してみると、都まで波が立ち来るとは聞いたことがないのに、実際に私は立ち来る波の影響を受け、その結果、波に沈むことになっている、という含意が読み取れる。また、当該歌については、群書類従本『句題和歌』補遺に「つみなかりしかども人の事につきてしはらく籠居すべきよしありしころ式部大輔のもとへこまやかに申しをくりしふみのおくに」との詞書がある点に留意しておきたい。この詞書を踏まえつつ、山口博氏は当時の千里の境遇について、『罪なかりしかども』と断っているものの、事件に連坐して謫居した」と指摘する<sup>26</sup>。和歌の内容と千里の当時の境遇とを結び付けて考えると、この歌では、「立ち来る波」が事件に連坐した非運を暗喩的に表すものとして用いられると解することが可能であろう。千里は我が身が「立ち来る波」の影響を受け、その波に沈むと歌うことで、事件に連坐し、謫居に遭う沈淪の身を嘆いたのである。

119番の歌では海辺の波の繰り返し立ち返るという自然現象が千里の境遇を際立たせるものとなっている。前半において白波が寄せては返すことを詠み、後半では我が身を嘆く回数とその白波の回数よりも多いと述べる。

はるごとに あひてもあはぬ わが身かな はなのゆ  
きのみ ふりまがひつつ

— 『大江千里集』 詠懐部 117

としごとに はるあきとのみ かぞへつつ 身はひと

ときに あふよしもなし

—『大江千里集』 詠懐部 122

この二首では、千里は春と秋を除目叙位が行われる季節とし、そして、季節が巡るといふ自然の規律に言寄せて、不遇を述べる。117 番の歌は抒情と叙景という二つの部分からなる。前半では「春ごとに」の後に「あひてもあはぬ」といふ表現を付け加えて、春が年ごとに巡っても我が身は昇進の機会に巡り会えないことを詠む。後半では、視線を春の落花に転じ、散る花を雪に見立てて、花が雪のように降り紛っていると感傷的に詠む。122 番の歌では、千里は「春秋」の後に「のみ」といふ副助詞を付けつつ、その時に会えない自分を詠み込む。歌の趣旨は、年ごとに春と秋を除目叙位だけを期待して数えながらも、なかなか人生の榮転に巡り会えない身の上を嘆くものとなる。

ほととぎす さつきまたずぞ なきにける はかなく  
はるを すぐしきぬれば

—『大江千里集』 詠懐部 125

125 番の歌は『千里集』の最後の歌である。素材としての時鳥は通常、初夏の頃から鳴き始めているため、和歌ではその声が春の終わりを象徴するものとして詠まれる場合もある。当該歌でも、五月にならないのに時鳥が鳴き始めていることで、春を惜しむ気持ちが表されている。その春は「儂く」と修飾されており、千里にとって実の無いまま過ぎてしまった季節となったことがうかがえる。ここにも自身の不遇を読み取ることができよう。

以上、詠懐部の歌を見てきた。千里は、事物の客観的な性質や現象などを描きながら、そこに自己の姿を投影し、自身の「懐」を表出する。このような表現の方法は詠物詩の創作手法<sup>27</sup>に通じるものである。

さて、このように見てくると、『千里集』における「述懐部」と「詠懐部」の違いも明らかになってきたと言える。「述懐」と「詠懐」の違いとは、句題の有無という外形面ばかりではなく、主題や表現面にも及んでいる。「述懐部」の主題は、千里は自分の内面を凝視し、そこに潜んでいる無常観、無常観への克服、嘆老などのような様々な所感が交錯している人生観、処世観を吐露することにより、社会的地位をめぐる不遇を表出する「詠懐部」と趣を異にしている。表現手法に関しては、「述懐部」では千里が人生観、処世観を直接的、率直的に詠む。「詠懐部」では千里が詠物的な手法を取って、不遇感を間接的、婉曲的に訴える。

では、なぜ千里は「述懐部」と「詠懐部」で異なる手法を取ったのか。特に、千里はなぜ「詠懐部」で詠物的な手法によって、不遇という「懐」を間接的、婉曲的に訴えるのか疑問である。次節でこの点について考察す

る。

#### 4. 「詠懐部」における詠物的な手法

なぜ千里は「詠懐部」で詠物的な手法によって、不遇を間接的、婉曲的に訴えるのであろうか。従来、この問題が正面から取り挙げられたことはほとんどなかったと思われる。ここでは、千里の時代において、不遇を訴えるという主題がどのように詠まれたのかという問題について検討を展開し、見解を述べてみたい。

まずは、千里の時代にあつて、不遇を訴えるという主題は公的な場でどのように思われたのかについて考えてみたい。律令制社会では身分秩序が厳密である。詩宴、歌合などの場は、通常、君臣によって構成されているのである。天皇臨席のこれらの場において不遇を述べることについて、滝川幸司氏は「詩宴で個人的な不遇を詠めば、極端に言えば、天皇以下の身分秩序への不満になってしまうのである。だからこそ、個人的な不遇が詠まれることは原則としてあり得ないのである」と指摘する<sup>28</sup>。即ち、不遇を託せば、天皇以下の身分秩序への不満になるため、我が身の不遇を述べるというのは詩宴にふさわしいものではないということになる。そのような理由があるためか、野本瑠美氏も「歌合などの晴の場では不遇を嘆く述懐的な内容の和歌は長く忌避されてきた」と説く<sup>29</sup>。但し、大治三年（一一二六）に転機が訪れる。

「西宮歌合」、「南宮歌合」、「住吉歌合」などで「述懐」が歌題として認められたことに伴い、不遇沈淪を詠む歌が徐々に歌合に頻出するようになっていくのである<sup>30</sup>。こうして概観してみると、不遇を訴えるという主題は千里の生きた時代にあつてはまだ、詩宴、歌合などの公的な場で披露すべきものではないことが確認できよう。

次に、召歌において「不遇」がどのように詠まれたのかを考えてみたい。『千里集』が献上された宇多朝の召歌について、徳原茂実氏は「宇多帝は興風、千里、勝臣といった歌人たちに歌を奉らせている」と指摘しつつ、これらの歌人たちに献上された歌のうちに、「あしたづのひとりおくれでなく声は雲のうへまできこえつがなん（『古今集』 998 番 大江千里）」と「人しれず思ふ心は春霞たちいでて君が目にも見えなむ（『古今集』 999 番 藤原勝臣）」は述懐的な歌であると述べている<sup>31</sup>。徳原氏の掲げる『古今集』の 998 番歌は『大江千里集』における詠懐部の 120 番の歌である。前述したように、この歌で千里は沈淪の身を「鶴」の声に託し、帝の耳に届いて欲しいと詠んでいる。また、藤原勝臣の歌も官位の昇進を願うものと解される。窪田空徳氏はこの歌にある「『思ふ心』は願いの意。この一つの願いは昇進を暗示させる。『春』は京の官人の定期の昇進の季節で、それを暗示している」

と解説している<sup>32</sup>。やはり千里と同じく間接的な形を取って、天皇に自らの不遇を訴えている。

時代を少し遡って宇多朝以前の召歌を顧みてみると、小野泰央氏は『古今集』撰進以前の天皇に奉られた不遇歌として、「奥山の岩垣もみぢちりぬべし照る日のひかりみる時なくて（『古今集』秋下・二八二・関雄）」、「春の日の光にあたる我なれど頭の雪となるぞわびしき（『古今集』春上・八・康秀）」、「花の木にあらざらめども咲きにけりふりにしこのみなる時も哉（『古今集』物名・四四五・康秀）」、「わくらばに問人あらば須磨の浦にもしほたれつつ侘ぶとこたへよ（『古今集』雑下・九六二・行平）」などが挙げられるとし、これらの歌はいずれも不遇を間接的に表出したものであると指摘する。更に、「天皇に自らの不遇を直接訴える歌はやはり古今集時代以前には多くを見出すことはできない」とも説く<sup>33</sup>。

ここに確認してきた諸点を踏まえると、千里が「詠懐部」で詠物的な手法によって不遇を間接的に訴えるのは、当時において、直接的な不遇の表出を忌避する配慮が働いたと考えることができる。

## 5. 結び

本稿の冒頭で述べたように、『大江千里集』には「述懐」と「詠懐」という二つの部立てが設けられている。このように「述懐」と「詠懐」を和歌の部立てとして併設したのは『大江千里集』が嚆矢となる。従来、『大江千里集』における「詠懐部」の歌について、それが天皇に不遇を訴えるものであり、そしてその在りようは述懐部と同様であると把握されてきた。こういった先行研究の状況に対して本稿では、前者の不遇詠という把握については同様の立場に立つものの、後者の詠懐部との関係については別の見解を提示することになる。

本稿では、『千里集』における「述懐部」と「詠懐部」の歌について分析し、その違いを主題と表現手法の観点から指摘した。具体的には、「述懐部」の主題は、千里が自分の内面を凝視し、そこに潜んでいる無常観、無常観への克服、嘆老などのような感傷的な詠嘆と超然的な態度を基調とする人生観や処世観を吐露することにある。これは社会的地位をめぐって不遇を表出する「詠懐部」と趣を異にしていると考えられる。表現手法に関しては、「述懐部」では千里が人生観、処世観を直接的、率直的に詠み、「詠懐部」では千里が事物の客観的な性質や現象などを描きながら、そこに自己の姿を投影し、自身の不遇を間接的、婉曲的に表出することを析出した。このような表現手法は詠物詩の創作方法に通じる。最後に、大江千里が「詠懐部」で「詠物」という婉曲的、間接的な表現手法を用いて、不遇を述べる理由について試論を加

えた。千里の生きた時代にあつて、直接的な不遇の表出は詩宴、歌合などの公的な場においても、召歌においても、長く忌避されてきたことも留意される。これらのことを考慮すると、千里が「詠懐部」で詠物的な手法を用いて、不遇を述べるのは、当時において、直接的な不遇の表出を忌避する配慮が働いたと想定できよう。

和歌の用例調査は「古典ライブラリー」及び「和歌データベース」に拠る。

漢詩の用例調査は「搜韻」に拠る

<注>

- 1) 小島憲之『日本古典文学体系 69 懐 風藻 文華秀麗集・本朝文粹』（岩波書房、1964年6月、71頁）
- 2) 藤井良雄「昭明『文選』における「詠懐」の成立について」（『福岡教育大学紀要』第1分冊42号、1993年2月）
- 3) 山口博『王朝歌壇の研究—宇多・醍醐・朱雀朝篇』（桜楓社、1973年1月、151頁）
- 4) 小野泰央『『大江千里集』「詠懐」部と「添ふる歌」—その表現と主題について』（『和歌文学研究』76巻、1998年6月）
- 5) 中国の漢詩では、「述懐」と「詠懐」は共に詩題として採用されている。「述懐」と「詠懐」の意味については、『大漢和辞典』に拠れば、「述懐」は「自分の思ひをのべる。所懐をのべる」、「詠懐」は「おもひをうたふ」という解説が見られる。定義通りに考えるならば、「詠懐」と「述懐」は概念が重なり合う二つの言葉である。詩題として用いられる場合の「述懐」と「詠懐」については、前野直彬氏によれば、中国の述懐、詠懐の詩は区分されるものではなく、いずれも「その境遇に対する感慨を詠じた詩である」という（『唐詩選』(上)、岩波文庫、2003年8月、30頁）。なお、「述懐」と「詠懐」の両方の詠作を持つ詩人として北周の庾信と晋人支遁が挙げられる。但し両人の詩も、小島憲之氏によって、「『述懐』と『詠懐』との間には意味内容の差をみない」と指摘されている（『国風暗黒時代の文学・補篇（漢語表現の受容—一、二の漢語を通して—）』、塙書房、2002年2月、114頁）。
- 6) 内田徹「述懐歌の形成」（『文藝と批評』六巻五号、1987年2月）
- 7) 木村尚志「述懐歌の歴史」（『東アジア日本語教育・日本文化研究』13巻、2010年3月）
- 8) 『大江千里集』の本文は、『千里集全釈』（風間書房、2007年2月）が底本とする流布本系の伝寂蓮本に拠る。なお、意味不通の場合は異本系の書陵部本によって改めた。句題の原拠詩は『千里集全釈』に掲載される那波本『白氏文集』などに拠る。
- 9) 『漢語大詞典』（全三冊）（漢語大詞典出版社、1997年4月）。以下同様。
- 10) 金谷治訳注『莊子』第二冊（岩波文庫、1975年5月、222～223頁）
- 11) 岡村繁『新釈漢文大系 106 白氏文集（十）』（明治書院、2014年12月、57頁）
- 12) 「こころひとつ」という表現は、『日本語国語大辞典』（第2版、小学

館、2007年)にも立項されており、そこでは「他の考え方を切り捨てて残った、たった一つの考え方。その考えだけ」とある。本稿の試解はそれを踏まえたもので、雑念をはらって心を平静にするという意味で取っている。

13) 109番歌は、本稿が底本とする伝寂蓮筆本で、「かなしきもうれしきこともおほかるをこころひとつぞなたつかりける」としているが、後二句の「こころひとつぞなたつかりける」が文意不通である。また、『千里集全釈』は、伝寂蓮筆本所収の当該歌について、「この底本の和歌は『灰』を含まない。書本の下句は「はいと成りぬべらなり」とし冷本も同じく、夫木抄もそれによる」と指摘する。そのため、本稿でも、109番の本文については、書陵部本の「かなしきもうれしきことも大かたはこころのはひと成りぬべらなり」に拠ることとする。

14) 羅玉鳳『漢語大詞典』(縮印本)中巻(漢語大詞典出版社、1997年4月、4225頁)

15) 雫雪艶『藤原定家「文集百首」の比較文学的研究』(汲古書院、2002年2月、330頁)

16) 岡村繁『新釈漢文大系107 白氏文集(十一)』(明治書院、2015年9月、359頁)

17) ここに掲げた107番歌の本文は書陵部本に拠るものである。当該歌について、伝寂蓮本では「はかなくていつも我身のひとりしてあしたゆふべにしつこころなき」とする。意味は、はかなくて、いつも我が身一人で朝夕平穏なく暮らしているというものである。しかし、句題原拠詩は長安の町中に居ながら心静かに閑居している様子を述べたものである。したがってその原拠詩を句題として詠まれた歌も「平穏な気持ち」をかたどっていると判断される。以上の点を踏まえて、107番の歌について、伝寂蓮本より、書陵部本の方が適切だと考えられる。そのため、107番歌の本文は書陵部本によることにする。

18) 岡村繁『新釈漢文大系99 白氏文集』(明治書院、1988年7月、69頁)

19) 当該歌の句題は主典が不明であり、本稿では句題原拠詩を掲げることができない。

20) 『漢語大詞典』に取り上げられた漢詩文の用例は「大王恵以恩光、顧以顔色」(江淹『獄中上建平王書』)や「如臣寵榮、豈足為論、慚惶踊躍、進退難安、拜受恩光、戰汗交集。」(元稹『為蕭相謝告身狀』)である。

21) 平野由紀子・千里集輪読会『千里集全釈』(風間書房、2007年2月、259頁)

22) 『拾遺和歌集』からの用例における「春」に対する理解は「春の到来を予感する。不遇から榮進への転換の時期の暗示と解したのである」との解説(新日本古典文学大系7『拾遺和歌集』小町谷照彦校注、岩波書店、一九九〇年一月、三三一頁)を参照。『玉吟集』からの用例における「春」に対する理解は「親が残した足跡は昔のこととなって荒れてしまったであろう。もしも公卿になれたという春に遇わなければ」との解説(和歌文学大系62『玉吟集』久保田淳、明治書院、2018年1月、116頁)を参照。

23) 田中智子「述懐歌の機能と類型表現:『毛詩』「鶴鳴」篇を踏まえた和歌を中心に」『むらさき/紫式部学会』51号、2014年12月)

24) 前掲注21書、266頁。

25) 前掲注21書、267頁。

26) 山口博『王朝歌壇の研究—宇多・醍醐・朱雀朝篇』(桜楓社、1973年1月、44頁)

27) 詠物詩の創作手法について、清代の詩論家李重華が『貞一齋詩説』で「詠物詩有兩法:一是将自身放頓在里面、一是将自身站立在傍边(「詠物詩」には二つの創作方法がある。一つは自分自身をその中に入れ、もう一つは自分自身をその傍に立つ、というものである。一筆者訳)」と述べる。「自身」は作者自身のことを指す。「里面」と「傍边」の分界線は作者と「物」との関係に存在する。「将自身放頓在里面」とは作者が自身の気持ちや感情を「物」に託して表現することである。「将自身站立在傍边」とは作者が傍観者の立場に立って、「物」の本来の特徴や性質を客観的に描写することである。『千里集』の「詠懐部」に使用する手法は「将自身放頓在里面」に通じる。

28) 滝川幸司「宇多朝の文壇」(『奈良大学紀要』30号、2002年3月)

29) 野本瑠美氏『久安百首』の「短歌—長歌形式による述懐の方法—」(『島大國文』35号、2015年3月)

30) 峯岸義秋「歌合における述懐の歌」(『東北大学教養部文科紀要』1号、1958年3月)

31) 徳原茂実「宇多・醍醐朝の歌召をめぐって」(『中古文学』26、1980年10月)

32) 窪田空穂『古今和歌集評釈 下巻』(東京堂、1960年6月、171頁)

33) 小野泰央「申文としての和歌—十世紀歌人の不遇感と表現—」(『東洋文化』94号、2005年4月)